興福寺境内の調査

―第553次・第559次

1　はじめに

興福寺では「興福寺境内整備基本構想」（1998年）に基づき、寺観の復元・整備が進められている。これにともない、奈良文化財研究所では1998年以来、中金堂院、南大門、北円堂院、西室（西僧房）などの発掘調査を継続しておこなっている。今回もその一環として、中室（東僧房）、経蔵および鐘楼を対象として調査をおこなった（第559次調査）。また防災設備工事のため、興福寺境内各所で、発掘調査を実施した（第553次調査）。

第559次調査は、５つの調査区を設定した。これをＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅ区と呼称する（図218）。Ａ区は中室大房北縁部202㎡、Ｂ区は同南縁部148.5㎡、Ｃ区は経蔵406㎡、Ｄ区は鐘楼西北部60㎡、Ｅ区は同東南部25㎡である。調査面積は計841.5㎡、うちＢ区の29.5㎡は第308次調査区と重複する。Ａ・Ｂ区は中室大房の規模の確認、Ｃ区は経蔵の全容解明、Ｄ・Ｅ区は鐘楼の規模の確認を主な調査目的とした。調査は2015年10月２日より開始し、2016年１月15日に終了した。

2　第559次調査

中室・経蔵・鐘楼の概要と既往の調査

中室・経蔵・鐘楼の概要　興福寺は、中金堂と講堂の東・西・北をコの字型に取り囲む三面僧房を有しており、東僧房は「中室」、西僧房は「西室」、北僧房は「北室」と呼ばれている。中室は西室と同様、大房と小子房からなる。経蔵は中金堂の北東に、鐘楼は北西に建てられた。中室・経蔵・鐘楼の建立年代は、『興福寺流記』等の史料から奈良時代初頭と考えられる。建立以後７～８度罹災したとみられ、享保２年（1717）の焼失以後は、再建されることなく現在にいたっている。

既往の調査と復元　中室にかかる調査としては、1956年におこなわれた食堂発掘調査の際に、小子房の東・南面の基壇外装（凝灰岩製の地覆石、羽目石および葛石）とその外周の石敷きを検出している[1]。また、1976年の水道管埋設工事にともなう調査では、大房南辺柱列の礎石と地覆石を検出している[2]。1998年の第308次調査では、

図218　第559次調査区位置図　1：2500

それと一部重複する位置で大房の西南隅を調査し、新たに西辺柱列の礎石を確認した[3]。鐘楼については、1975年の水道管埋設工事にともなう調査で、中金堂・講堂と鐘楼との間において人頭大の石を用いた石敷きを検出している[2]。これらはいずれも建物のごく一部もしくは建物周辺の調査であり、中室・経蔵・鐘楼の本体に関わる本格的な調査は今回が初めてである。

建物規模の復元は、これまで『興福寺流記』と地表に露出している礎石の実測をもとにおこなわれてきた。中室大房については、大岡實による案[4]と、鈴木嘉吉による案[5]がある。両案とも梁行方向は４間、総長45尺とするが、大岡案は桁行９間、総長は202.5尺、柱間寸法は22.5尺とし、北室との規則性を重視する。これに対し鈴木案は、桁行11間、総長は210尺、柱間寸法は北から５間目のみ20尺で他は19尺とする。鈴木案は食堂の発掘調査成果をふまえ、講堂と食堂とを結ぶ軒廊が中室大房と小子房を馬道として貫き、その部分の柱間が他と異なるとみる。経蔵・鐘楼については、大岡案があり、これまでに大きな異論は出されていない。大岡案は、経蔵・鐘楼いずれも桁行３間で総長３丈４尺、柱間寸法は中央間が12尺で両脇間は11尺。梁行は２間で総長２丈２尺、柱間寸法は11尺等間とする。

地形と基本層序

調査前、経蔵と鐘楼には土壇が残っており、地表に礎石の上面が露出していた。中室大房（以下、中室と略記）

には土壇はなかったが、北半では同様に礎石の上面が地表に露出していた。

基本層序は、以下のとおりである。中室は、表土および近代以降の造成土が40㎝程度あり、その直下が、基壇部分では基壇土、基壇の周囲では石組溝・玉石敷となる。遺構検出面の標高は、基壇土上面がＡ区で95.3m、Ｂ区で95.4m、基壇北側が95.2m、西側が95.4mである。

経蔵は、基壇部分は表土および近代以降の造成土の直下が基壇土である。基壇は地山を削り出した上に土を積んで造られており、創建当初の積土の上に、部分的に中近世の積土も確認した。遺構は基壇土上面で検出し、西北部では中近世の積土を掘り下げた面でも検出した。基壇の周囲では、表土および近代以降の造成土の下に古代～中近世の整地土を複数層確認し、それぞれの上面で遺構を検出した。標高は、基壇土上面が96.1m、最上層の整地土上面が95.5m、地山上面が95.3mである。

鐘楼は、基壇部分が大きく削平を受けており、現存の土壇には近代以降の造成土が厚く盛られていた。その直下が基壇土で、近世以前の積土が一部残るほかは、ほぼ地山であった。遺構は基壇土上面で検出した。基壇の周囲では、近代以降の造成土と地山との間に整地土を複数層確認し、それぞれの上面および地山上面で遺構を検出した。標高は基壇土上面が95.6m、最上層の整地土上面が95.5m、地山上面が95.3mである。

第559次調査で検出した主な遺構は、礎石建物３棟、南北溝２条、東西溝３条、玉石敷３条などである。以下、調査区ごとにその概要を述べる。

中室（Ａ・Ｂ区）の遺構

礎石建物SB7590（中室大房）　長大な南北棟建物で、桁行11間、梁行４間と推定されるが、詳細は後述する。今回の調査では、北端の桁行１間、梁行３間分（Ａ区）と南端の桁行１間、梁行３間分（Ｂ区）について、礎石およびその据付穴や抜取穴を確認した。東の側柱と基壇縁は、現在の参道にあたるため調査できなかった。礎石は長径１m前後の安山岩で、柱座などの造り出しはない。桁行の各柱間には、長径約50㎝の小型の礎石を２基ずつ配置する。南面では、各柱間に長径45～50㎝の小型の石を３基ずつ配置しており、この上に木製の地覆を置いたと考えられる。このような地覆を受ける礎石は、西面と北面では確認できなかった。残存する礎石は、ほとんどが動かされた形跡がなく、創建当初の位置を保っているとみられる。建物規模は、桁行総長が約62.8m（213尺、基準尺は１尺＝0.295m）、柱間寸法は北端の１間が約5.9m（20尺）、南端の１間が約5.6m（19尺）。梁行は11.3m以上で、柱間寸法は西から約3.0m（10尺）、約3.2m（11尺）、約3.2m（11尺）である。

基　壇　基壇は地山を削り出して造られており、Ａ区ではその上に黄褐色粘質土の積土を確認した。基壇の規模は、南北が約67m（226尺）、東西は13.5m以上で、東は調査区外にのびる。残存する基壇高は、北端で約30㎝、南端で約25㎝である。基壇外装は、北面と南面で地覆石と羽目石を、西面北端で地覆石を確認した。北面はとくに状態が良く、羽目石の上端まで残存していた（図219）。地覆石は長さ約95㎝、幅約30㎝、高さ約20㎝、羽目石は長さ約95㎝、幅約15㎝、高さ約25㎝。大きさは均一で、互いに切り欠きを入れて組み合わせる。これらの外装は、二上山産の凝灰岩を用いていることや、裏込土が精良で炭化物や遺物が混じらないことから、創建期のものである可能性が高い。仮に後世のものだとしても、据付痕跡に重複がないことから、創建時の位置を踏襲してい

図219　中室北面の基壇外装（西から）

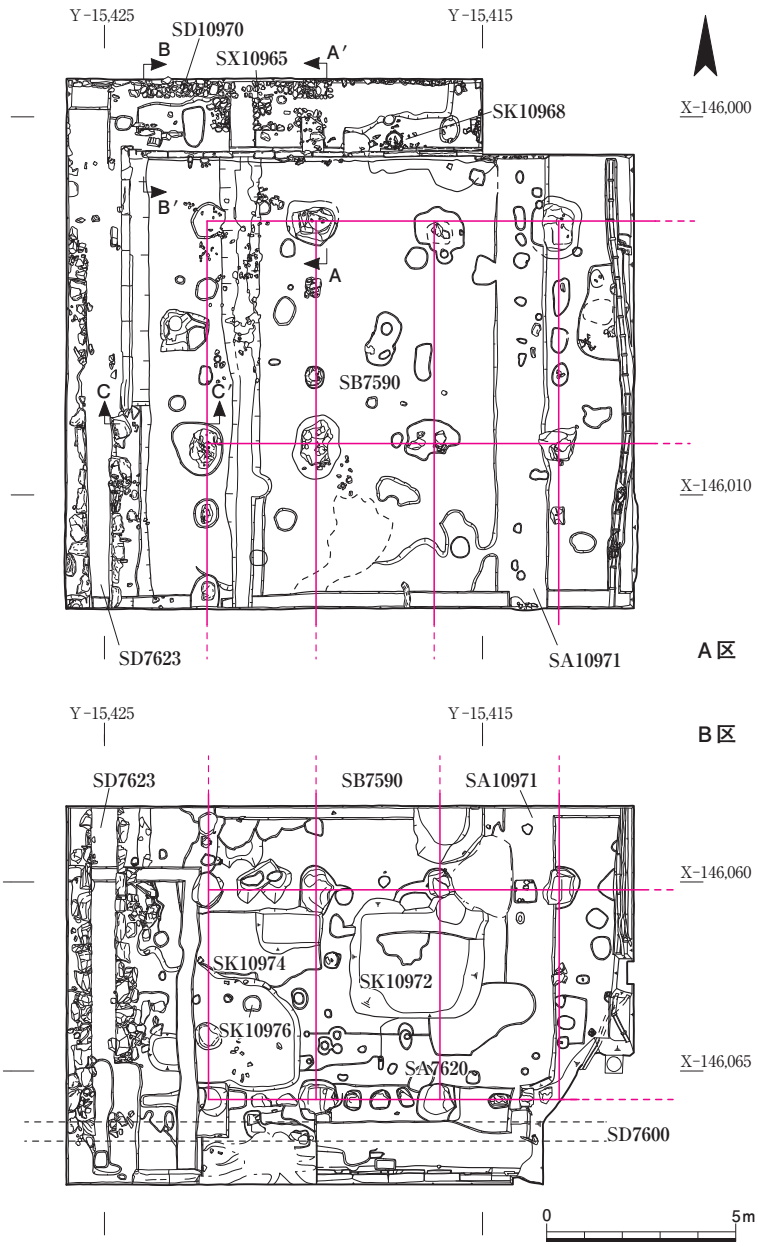


図220　第559次調査A区（上）・B区（下）遺構平面図　1：200

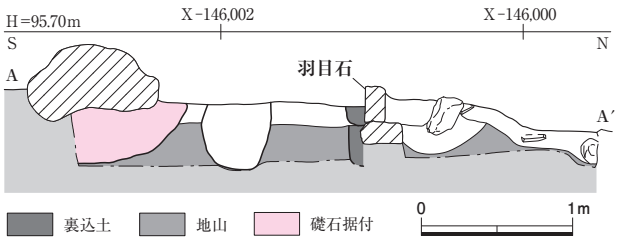


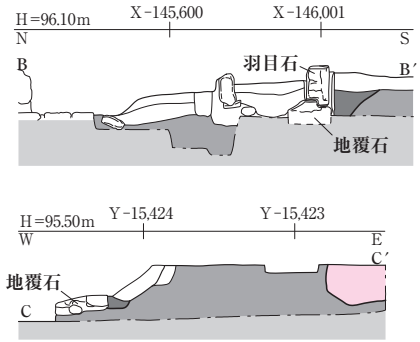
図221　第559次調査A区土層図　1：50

ると考えられる。

南北溝SD7623　中室の西辺に沿って北流する石組溝。A・B・C区にまたがって検出した。幅約65cm、深さ約35cm。側石には、片麻岩を主体とする長径約80cmの自然石を用いる。第308次調査でも検出しており、その成果をあわせると、総延長は約70mになる。第308次調査では享保焼失後の築造と考えていたが、側石に風化面で割った石をそのまま用いていることや、室町時代の『春日社寺曼荼羅』に描かれていることから、中世の築造とみて差し支えない。埋土に含まれる遺物の年代観から、明治時代に入って廃絶したと考えられる。興福寺境内の基幹排水路の一つとみられ、中室と併存している期間は、その西面の雨落溝としても機能していた可能性がある。なお、中室西面の古代雨落溝は、A・B区では確認できなかったが、C区で検出したSD10981がこれに該当するとみられる。

東西溝SD10970　中室の北で検出した東西方向の石組溝。幅40cm以上、深さ約10cmで、約6m分を検出した。側石と底石には径15cm程度の

図222　SK10968瓦質火鉢出土状況（北から）



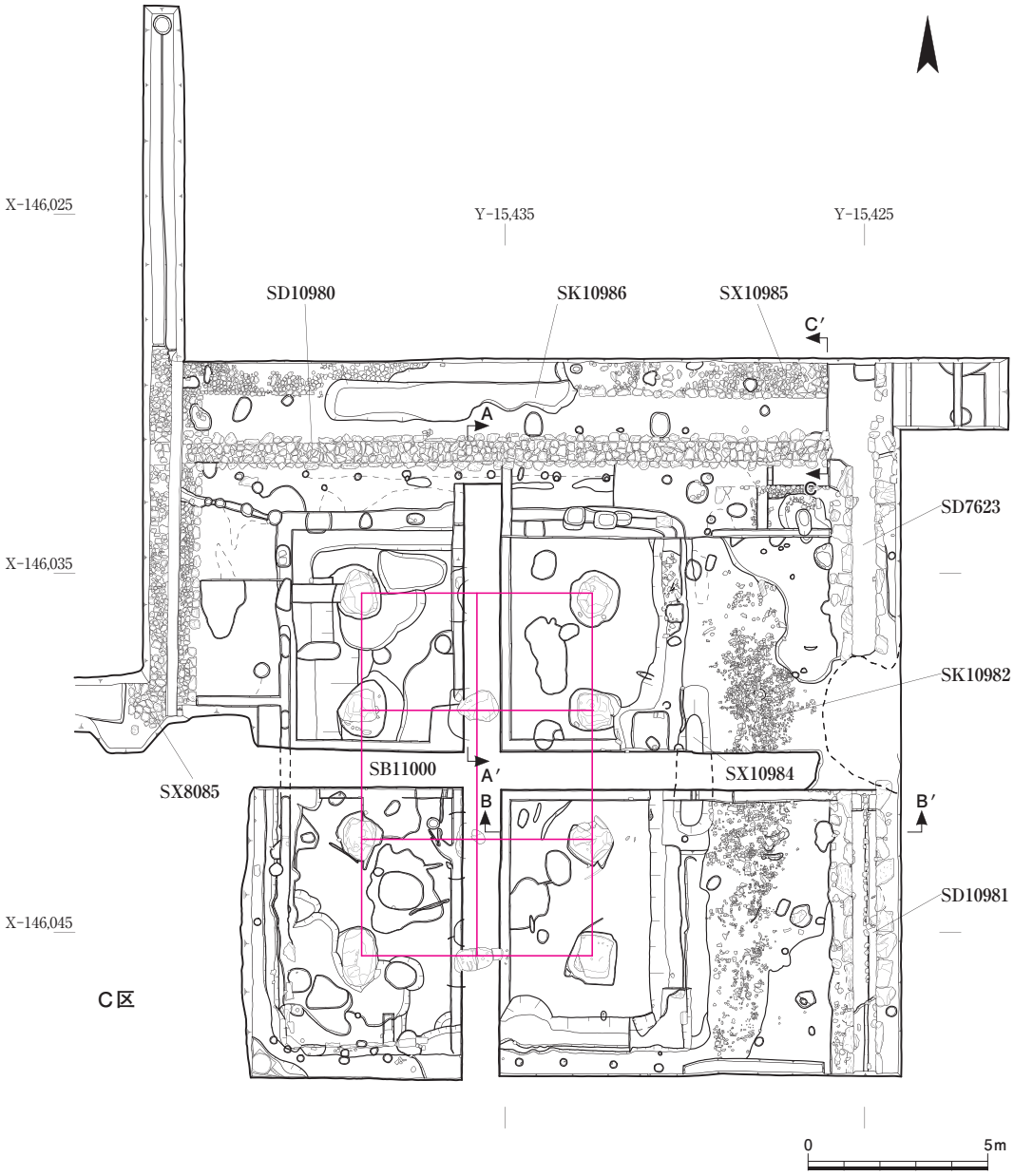


図223　第559次調査C区遺構平面図　1：200

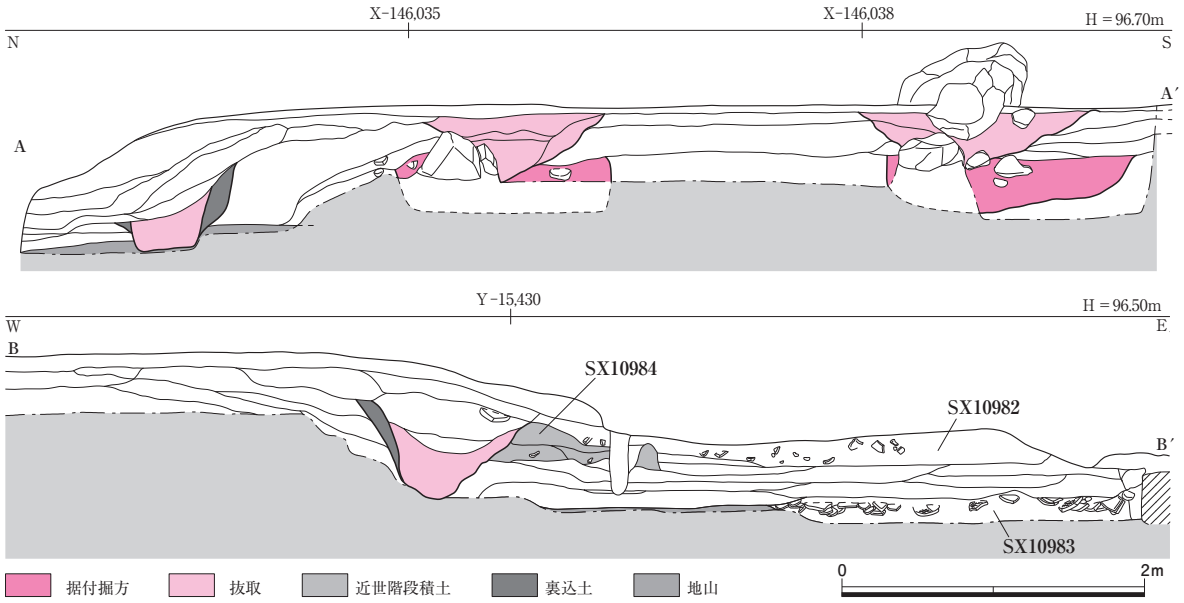


図224　第559次調査C区土層図　1：50

玉石を用いる。北室南面の古代の雨落溝と考えられる。

玉石敷SX10965　SD10970の南に接する東西方向の石敷き。拳大の石を敷き詰め、南側に長径20㎝程度の見切石を並べる。幅は約75㎝。長さ約３ｍ分を検出した。なお、見切石の南に接する位置で、東西方向の凝灰岩列およびその抜取溝を検出している。

土坑SK10968　Ａ区北端、中室基壇の北側で検出した不整形の土坑。東西2.4ｍ以上、南北0.5ｍ以上、深さ約30㎝。埋土に多量の瓦を含む。底部付近からほぼ完形の瓦質火鉢が出土した（図222、後述）。

東西溝SD7600　第308次調査で検出した東西方向の素掘溝。中室の礎石据付掘方と重複し、それより古い。三条条間南小路北側溝の可能性が指摘されている。今回Ｂ区の一部でその延長部分を確認した。幅約30㎝、深さ約15㎝。これまでに検出した総長は23.6ｍで、さらに調査区の東方にのびる。

築地塀SA7620・SA10971　SA7620は、第308次調査で検出した東西方向の築地塀。明治21年（1888）ごろ、奈良公園における興福寺の寺地が定められた際に設けられたものである。今回その東延長部がＢ区で北に折れ、Ａ区を超えてさらに北に続くことを確認した。南北方向の築地塀をSA10971とする。SA7620の東延長部は約9.5ｍ分検出し、第308次調査とあわせ、長さ14.7ｍと確定した。SA10971はＢ区で約4.4ｍ分、Ａ区で約12ｍ分を検出し、総延長は64.4ｍとなる。いずれも大石を積んだ基底部と瓦の詰まった積土を検出した。基底部の幅は0.9ｍ前後、掘方の幅は1.4ｍ前後である。

その他　他にＢ区の基壇上面で、近世～近代の廃棄土坑を複数検出した（SK10972、SK10974、SK10976など）。いずれも埋土に多量の瓦を含む。

経蔵（Ｃ区）の遺構

礎石建物SB11000（経蔵）　桁行３間、梁行２間の南北棟建物。礎石８基のほか、礎石の据付穴や抜取穴を検出した。礎石は長径1.0～1.6ｍの安山岩で、柱座などの造り出しはない。残存する礎石は、一部動かされているものもあるが、多くが創建当初の位置を保っている。建物規模は、桁行総長約10.1ｍ（34尺）、柱間寸法は中央間のみ約3.5ｍ（12尺）で、両脇間は各々約3.2ｍ（11尺）。梁行総長約6.5ｍ（22尺）で、柱間寸法は約3.2ｍ（11尺）等間。

基　壇　現存する基壇の規模は、南北約15ｍ、東西約

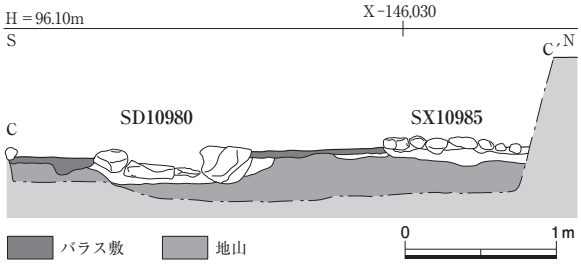


図225　第559次調査Ｃ区土層図　１：50

11ｍ、高さ約75㎝。基壇は、黄褐色砂礫土の地山を削り出した上に土を円丘状に積み、外装はこれをカットして据えたとみられる。版築は確認していないが、薬師寺東塔の基壇の造成方法[6]と似ており興味深い。再建の際にも同様の方法で補修されていたのであろう。基壇外装は、西南部と東北隅で室町時代以降に据え付けられたとみられる羽目石の一部を確認したほかは、近代の抜取溝が残るのみである。しかしながら、古代の痕跡が確認できなかったことは、古い位置を踏襲して再建が繰り返されたことを示すと考えられる。また、雨落溝は検出しておらず、基壇北面の小砂利敷に雨垂れの痕跡がみられたことから、雨落溝はともなわないと考えられる。基壇の東面では、近世の階段の可能性がある高まりSX10984を確認した。東西約1.1ｍ、南北約4.2ｍ、高さは約20㎝。東面中央部分で断割調査をおこなったが、中世以前の階段の有無は判然としない。このほかに、基壇の周囲で建設時の足場とみられる小穴列を検出している。

瓦溜SX10982　基壇の東面に沿って、東西約２ｍ、南北約12ｍの範囲に帯状に広がる。瓦の年代は近世が主体で、享保２年（1717）の火災後の片付けにともなって廃棄されたものと考えられる。

瓦溜SX10983　基壇の東面、瓦溜SX10972の下層で検出した。東西2.0ｍ以上、南北2.6ｍ以上の範囲に広がる。時期は古代とみられる。

東西溝SD10980　経蔵の北を東西に走る石組溝。側石・底石に径25㎝程度の玉石を用いる。幅約50㎝、深さ約10㎝で、長さ約19ｍ分を検出した。西はさらに調査区外にのびる。東は中室西辺の南北溝SD7623に壊されているが、古代においては中室西面の雨落溝に接続していたとみられる。鐘楼の北でも、伽藍中軸線をはさんでほぼ東西対称の位置で、同様の石組溝SD10990を検出している。これらは地山直上に据え付けられており、創建期に遡る可能性が高い。講堂周辺の排水溝と考えられる。

玉石敷SX10985　東西溝SD10980の北で検出した東西方向の石敷き。拳大の玉石を敷き詰めており、南側に

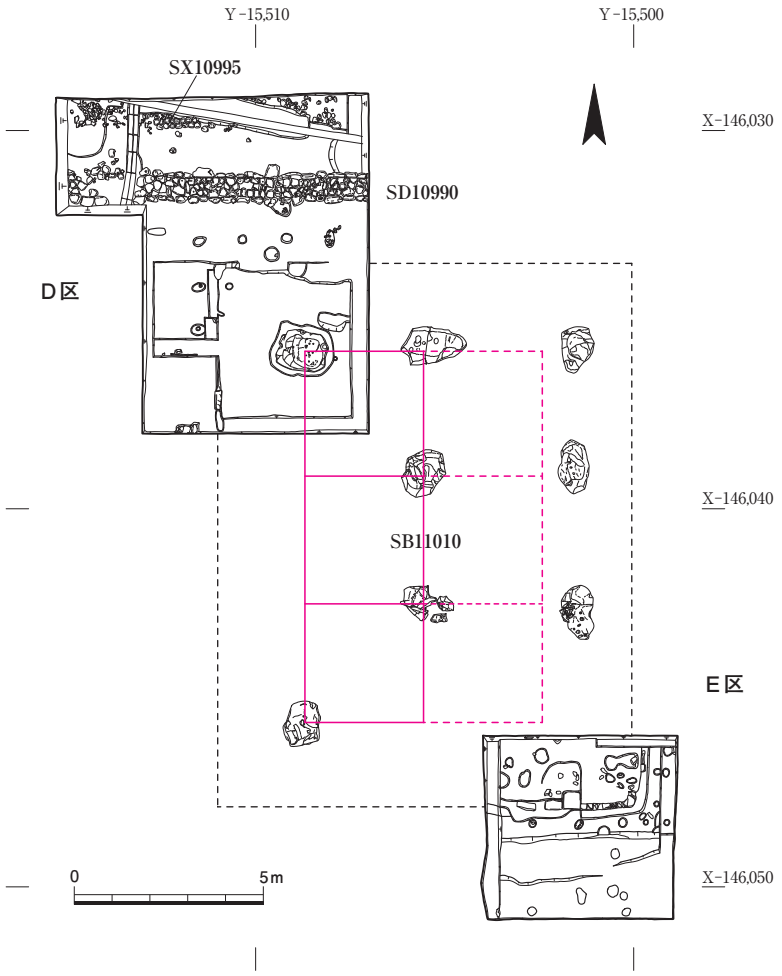


図226　第559次調査D・E区遺構平面図　1：200

長径20～30cmの見切石を並べている。幅は1.3m以上で、長さ約19m分を検出した。土坑SK10986と重複し、それより古い。鐘楼の北でも、伽藍中軸線をはさんでほぼ東西対称の位置で、玉石敷SX10995を検出している。

玉石敷SX8085　経蔵の西で検出した南北方向の石敷き。拳大の玉石を敷き詰め、東西両側に長径25cm程度の見切石を並べている。幅は約２ｍで、長さ約９ｍ分を検出した。東西溝SD10980をはさんでその北にものび、玉石敷SX10985に接続する。第325次調査（2001年度）で検出した玉石敷の北延長部にあたり、総延長は約28mになる。

土坑SK10986　東西溝SD10980の北で検出した不整形の土坑。東西5.2m以上、南北1.4m以上、深さ約25cm。鎌倉時代の土器がまとまって出土した。玉石敷SX10985と重複し、それより新しい。

南北溝SD10981　Ｃ区南半、南北溝SD7623の底で検出した。長さ7.7m以上、幅30cm以上、深さ約10cm。西肩に拳大の石を据えて側石とする。底石は確認していない。中室の古代の西雨落溝の可能性がある。

鐘楼（D・E区）の遺構

礎石建物SB11010（鐘楼）　礎石は、西北隅の１基を確認した。長径約1.3mの安山岩で、柱座などの造り出しはない。東南隅では、想定位置で礎石やその据付穴・抜取穴を確認できず、削平されたとみられる。地表にはこのほかに７基の礎石が露出しており、その測量成果によると、鐘楼は桁行３間、梁行２間の南北棟建物で、桁行は全長約10m（34尺）。柱間寸法は中央間のみ約3.5m（12尺）で両脇間は約3.2 m（11尺）。梁行は全長約7.1m（24尺）で、柱間寸法は西が約3.2m（11尺）、東が約3.8m（13尺）となる。しかしながら、梁行が等間にならないのは不自然である。中央の礎石列は、基壇外装から想定できる基壇の中央に位置する点や、伽藍中軸線をはさんで経蔵と対称の位置にあることから、原位置を保つとみて良かろ

う。東側の礎石列については、発掘調査では確認していないが、東南隅では基壇土が大きく削平されていることから、原位置から東に動かされている可能性が高い。したがって、鐘楼についても、経蔵と同じ桁行３間（中央間12尺・両脇間各11尺）、梁行２間（11尺等間）であると考えるのが妥当であろう。

基　壇　西北隅と東南隅を確認した。基壇の規模は、東西約11.0m（37尺）、南北約14.5m（49尺）。基壇の出は、北面と西面が約2.2m（7.5尺）、東面と南面は不明である。現存する基壇の高さは、西北部で35～40㎝、東南部で約30㎝。基壇は黄褐色砂礫土の地山を削り出して造られており、裾の一部でにぶい黄褐色粘質土の積土を確認した。基壇外装は、一部で凝灰岩製の羽目石を確認した。経蔵の外装に類似していることから、室町時代以降のものとみられる。このほか、基壇の周囲で建設時の足場とみられる小穴列を検出している。

東西溝SD10990　鐘楼の北を東西方向に走る石組溝。側石・底石に長径30㎝程度の玉石を用いる。幅約50㎝、深さ約10㎝で、長さ約８m分を検出した。東西はさらに調査区外にのびる。経蔵の北で検出した石組溝SD10980と、伽藍中軸線をはさんで東西対称の位置にある。

玉石敷SX10995　東西溝SD10990の北で検出した石敷き。拳大の玉石を敷き詰めている。幅1.3m以上、長さ約5.5m分を検出した。経蔵の北で検出した玉石敷SX10985と、伽藍中軸線をはさんで東西対称の位置にある。

（桑田訓也）

出土遺物

土器・土製品　奈良時代から近代にいたる土器、土製品、陶磁器が出土した。ここでは比較的まとまって出土した経蔵北側の大土坑SK10986と中室北側の土坑SK10968の土器について述べる。

SK10986出土土器　土師器皿が比較的まとまって出土した。大きさはややバラツキをもつものの、概ね口径8.3～10.0㎝の小皿（図227-1～10）と12.6～15.6㎝の中皿（図227-11～18）からなる。小皿は口縁端部が外反するもの（４・８）や端部が肥厚するもの（２）が一定量ある。中皿には、器高が高い一群（14・15）を含む特徴をもつ。こういった特徴は、大乗院の土器溜SX8829（第374次・第390次調査）出土の土師器皿と似ており、13世紀中頃に比定できる。

SK10968出土土器　土坑の底部付近に、瓦質土器の火鉢（図227-19）が、ほぼ完形に近い状態で廃棄されていた。口径40㎝に対し、器高が17㎝（脚部を含めると19.5㎝）とやや高い。体部外面を縦方向に丁寧に磨き、口縁端部付近は横方向に磨きを加え、菊花文の押印を施す。押印は、割付が不均等で、３個連続のところと２個連続の部分がある。内面は、下部で板状工具のナデが残るが、口縁部から３分の２程度は、粗いものの横方向の磨きが加えられる。器形、調整から、瓦質火鉢の中でも、やや古相の様相を呈すると考え、14世紀頃のものとみておく。

（神野　恵）

瓦磚類　古代から近世の瓦磚類が大量に出土した。中世の瓦が主体で、奈良時代のものは少ない。図228の１～４は軒丸瓦。１は6301Aで、奈良時代初頭の興福寺の創建瓦である。Ａ区のSA10971出土。２は単弁蓮華文で、外区に×文が施されているのが特徴的。平安時代か。Ｂ区のSK10976出土。３は左二巴文で、平安時代末頃のもの。４は「興福寺」銘軒丸瓦で、近世のもの。３・４ともに中室のSD7623から出土。５～12は軒平瓦。５は奈良時代初頭の6645A。藤原宮式軒平瓦に属するが、興福寺および平城京でのみ出土する。Ｂ区のSA7620より出土。６は6561A。奈良時代初頭のもので、Ｂ区のSK10972出土。興福寺では一乗院跡からの出土が多い。７は6671Lで、奈良時代前半のもの。Ｂ区のSA7620より出土。８は6682D。天平年間（平城還都前）の所産で、Ａ区のSA10971出土。平城京内では１点を除くとすべて興福寺から出土する型式。９は6739Aで、奈良時代末の宝亀年間のもの。経蔵の南面基壇外装の裏込土より出土。中金堂院回廊や食堂からも出土している。10は均整唐草文を配し、類例が平安時代後葉に認められることから、その頃のものか。11は菱形の中心飾りをもつ均整唐草文、12は半截菊花文の中心飾りをもつ水波文を配する。共に室町時代後半の所産。10・11は中室のSD7623出土、12はＢ区のSK10974より出土。

（林　正憲）

鉄製品　遺物包含層や瓦溜SX10982などから鉄製角釘が15点、SD7623などから鉄製丸釘が２点出土した。その他、鎹がＤ区西側の遺物包含層から、鉄製座金がSD7623から、留具状の鉄製品がＡ区西北の遺物包含層から出土している。

銅製品　経蔵北側の遺物包含層から、２㎝程度の破片であるが、風鐸の一部とみられる銅製品が出土した。経

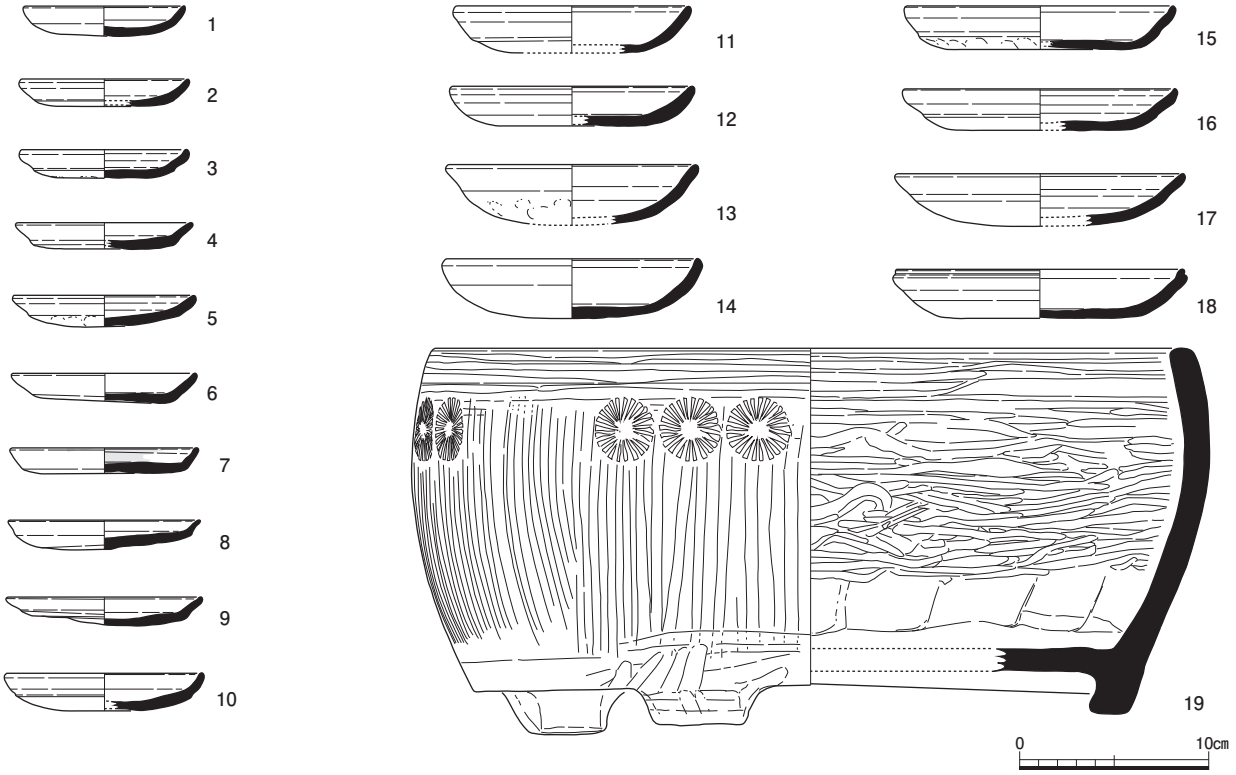


図227　第559次調査SK10986・SK10968出土土器　1：4

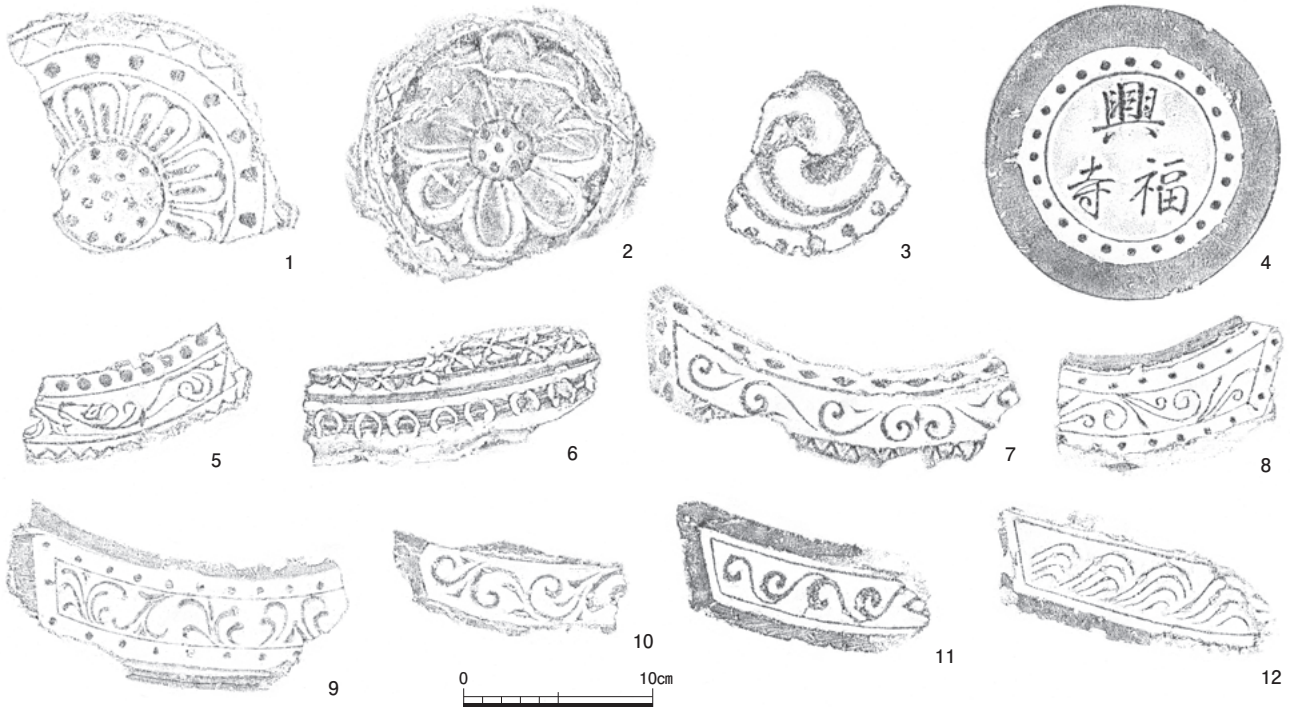


図228　第559次調査出土軒瓦　1：4

蔵基壇外装の抜取痕跡から、小型の円環状銅製品が、D区の遺物包含層から雁首キセルが１点出土した。

その他　経蔵の周囲を中心に、焼けた壁土が小片ながら50点近く出土した。また、A区北側では銅滓片１点と、B区北部のSK10972から鋳型片が２点、南部の築地塀SA10971掘方から鞴羽口が２点出土した。　**（神野）**

建物規模と柱配置の復元

中室の規模と柱配置　中室は桁行総長が約62.8m（213尺）で、従来の復元案よりも大規模であったことが判明した。柱配置については、地表に露出している礎石の測量成果もふまえると、桁行11間で、北５間分が20尺等間、南６間分が19尺等間とみるのがもっとも整合的である。ただし、先学が調査をおこなった昭和前半頃に地表に露出していた礎石は、その後の境内整備の盛土により、現在では多くが地中に埋もれている。今回の発掘調査では、北端（A区）と南端（B区）を検出したのみで、その間の未調査部分は看過できないほど広い。とくに経蔵北側で検出した玉石敷や石組溝との接続部分は、鈴木嘉吉が指摘するような馬道の有無など、全体の伽藍配置に関わる問題をはらんでいる。よって、今回の発掘調査成果を補完するデータを得るべく、地中レーダー探査をおこなった。中室の柱配置については、この分析結果を待って、再度詳細な検討をおこないたい。ここでは、上述の柱配置を現時点での復元案とする。

中室と西室の比較　西室については、第516次調査（2013年度）と第540次調査（2014年度）により、規模と柱配置が判明している[7]。それによれば、西室の桁行総長は212尺で、中室の213尺とほぼ同規模である。一方で柱配置は、中室が20尺と19尺を用いたほぼ均等な割付であるのに対し、西室は22.5尺を基本とし南端２間のみ16尺と狭くする。梁行については、中室の西から３間分の柱間寸法が西室と一致することから、中室も西室と同じく梁行４間で総長42尺、柱間寸法は中央２間が11尺でそれ以外が10尺と推定される。中室と西室を比較すると、両者の建物規模はほぼ同じであるものの、柱配置は大きく異なるといえる。　**（桑田）**

経蔵・鐘楼の規模と柱配置　前述のように、経蔵と鐘楼は、ともに東西２間（11尺等間）、南北３間（中央間12尺・両脇間各11尺）の規模をもつと考えられる。この点について、絵図の検討からさらに補強を試みたい。

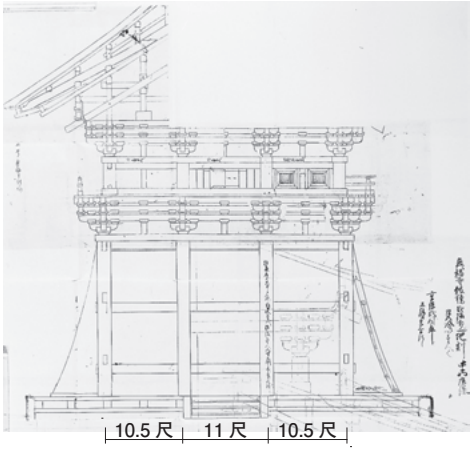


図229　『鼓楼弐拾歩一地割』（寸法加筆）

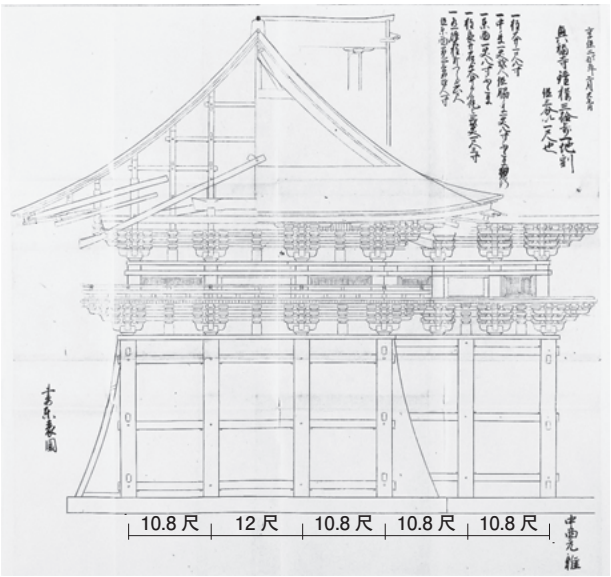


図230　『鐘楼三拾歩一地割』（寸法加筆）

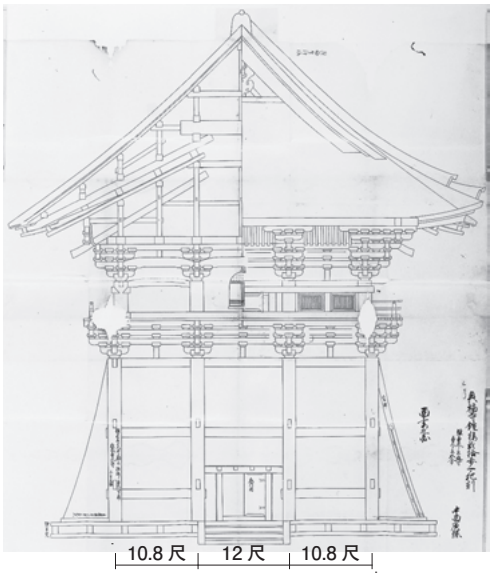


図231　『鐘楼弐拾歩一地割』（寸法加筆）

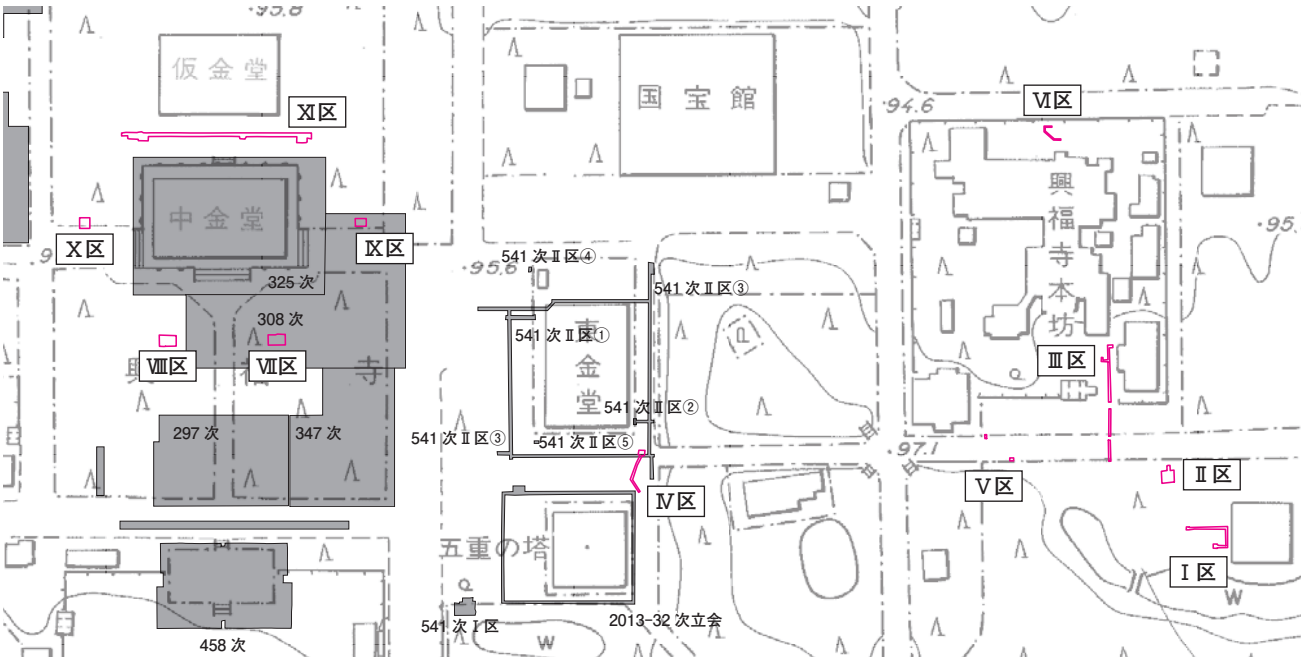


図232　第553次調査区位置図　1：2000

『興福寺建築諸図』（東京国立博物館所蔵）は主として享保２年（1717）１月４日の興福寺の火災前後に描かれた42葉の建築図面であり、今回発掘調査をおこなった鼓楼（経蔵はのちに鼓楼となる）と鐘楼についても計３葉の絵図があるが、いずれも火災後の復興計画図としての性格が強い。３葉はいわゆる建地割図（断面図）で、梁行断面と立面を描く。

図229『鼓楼弐拾歩一地割』は柱間寸法の記載はなく、梁行３間を中央間11尺程度、両脇間各10.5尺程度とみてよい。図230『鐘楼三拾歩一地割』は「中ノま一丈弐尺 但脇ノま一丈八寸ふたま梁行」、「東西一丈八寸ふたま」と柱間寸法を記す。すなわち梁行３間が中央間12尺・両脇間各10.8尺、桁行２間が各10.8尺であることがわかる。図231『鐘楼弐拾歩一地割』は柱間寸法の記載はないが、梁行３間を中央間12尺、両脇間各10.8尺とみて問題ない。上記のように、鼓楼と鐘楼では柱間寸法に違いがある。

このような鼓楼と鐘楼の絵図について、遺構との柱間寸法の対応関係を検討した。鼓楼については、図229の梁行３間（曲尺：１尺＝303㎜）の総長は約9.70mであり、遺構の南北３間の総長約10.10mよりも40cmほど短い。鐘楼については、図230・図231の梁行３間の総長は約10.18mであり、遺構の南北３間の総長約10.00mよりも20cmほど長い。また、図230の梁行２間の総長約6.55mは、遺構の東西２間の総長約6.70mよりも15cmほど長い。

上記のような絵図と遺構の対応については、建物の構造が大きく変わるような寸法差とは認められず、一致する関係にあるとみて問題はない。以上から、『興福寺建築諸図』は現存遺構上に計画された絵図と判断でき、鐘楼東列以外の礎石は、近世に焼失した鼓楼・鐘楼が建てられた室町時代以降、現在まで位置を変えていないと考えられる。　**（大橋正浩）**

ま と め

創建当初と再建時の規模　中室・経蔵については、創建当初の規模が推定できる礎石やその据付穴、基壇外装、雨落溝などの遺構を検出した。また、これまでの中金堂や南大門の調査成果と同じく、再建の際には創建当初の位置や規模を踏襲していることが判明した。鐘楼については、創建当初の規模まで明確には確認できなかったが、少なくとも室町時代の再建以降は、経蔵と同規模であったと推定できる。

中室と西室の柱配置　中室と西室は、全体規模はほぼ同じであることが判明した。一方で両者の柱配置は、中室になお検討の余地があるものの、大きく異なると考えられる。東西対称の位置にある僧房は、柱配置まで含めて対称であるのが一般的で、興福寺西室と中室の例は特異といえる。その理由については、今後、文献資料などとも照らしあわせながら追究していきたい。　**（桑田）**

３　第553次調査

調査の経過と概要

興福寺では、2013年度以降、1970年代に設置した防災設備（放水銃やそれに水を供給する水道管など）の取り替えや新規放水銃設置にともなう水道管などの埋設といった工事（境内防災工事）をおこなっている。この工事にとも

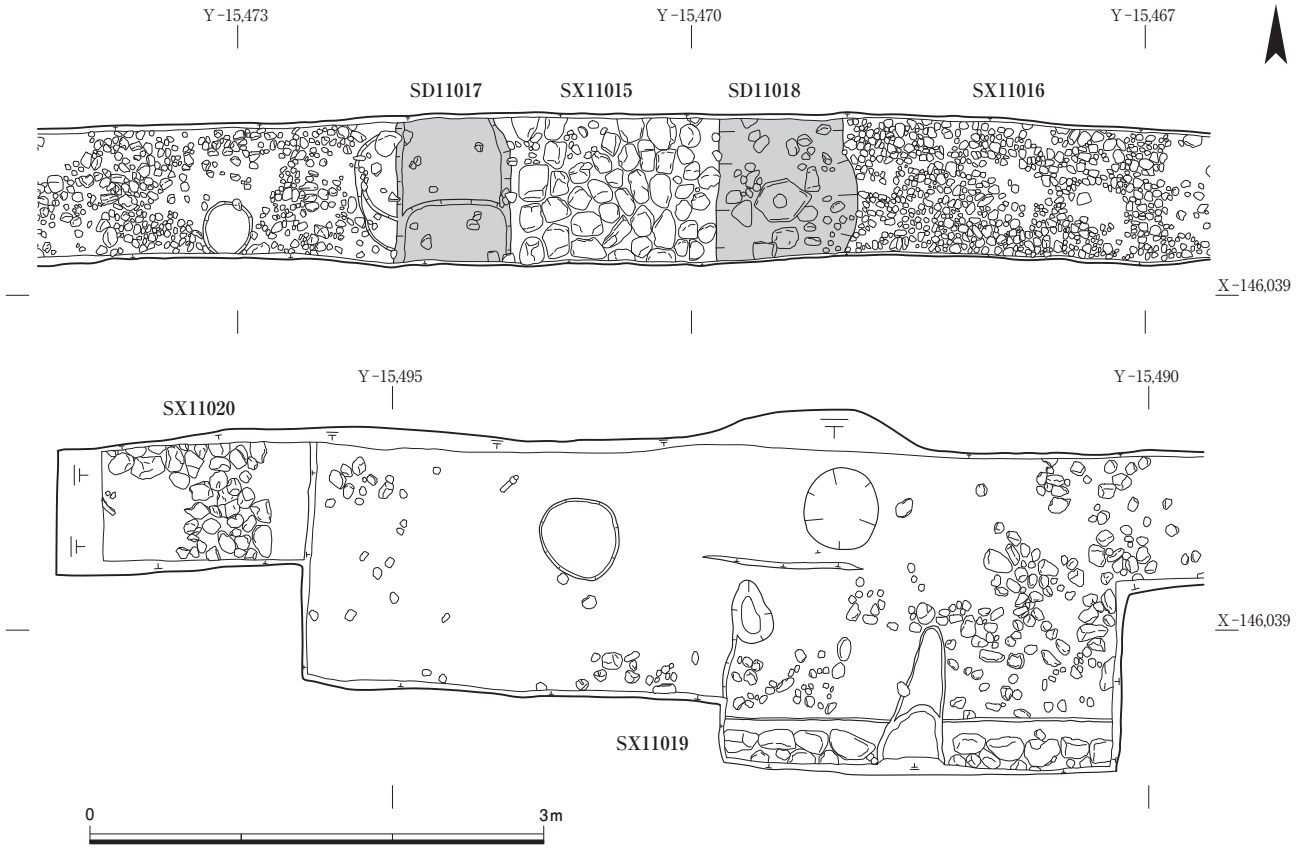


図233　第553次調査XI区中央部（上）・西端部（下）遺構平面図　1：50

なって、昨年度から発掘調査（第541次調査）をおこなっており、今年度も引き続き、第553次調査をおこなった。調査は配管にともなって新規掘削をおこなう箇所を対象としたため、境内各所で11ヵ所（Ⅰ～XI区）の調査をおこなった（図232）。調査面積は合計約154㎡で、2015年７月21日に調査を開始し、12月４日に調査を終了した。

基本層序

調査が境内各所にわたるため、それぞれ詳細は異なるものの、Ⅰ～Ⅵ・Ⅷ・Ⅹ区については、上から（ⅰ）表土、（ⅱ）現代の造成土ないし攪乱土、（ⅲ）中世以降の包含層、（ⅳ）地山となる。ただし、中金堂と講堂の間に設定したXI区では、（ⅲ）と（ⅳ）の間に鎌倉時代および室町時代の整地面が確認される。これについては、第559次調査の状況と同じである。なお、Ⅶ・Ⅸ区に関しては、1999年度に実施した第308次調査区内に位置するため、基本的には調査終了後の埋土で遺構面が覆われている状況である。

中金堂周辺の検出遺構

調査区の多くで顕著な遺構は検出されなかったが、中金堂周辺については一部で奈良時代にまで遡ると推定される遺構が検出されたため、それらについて詳述する。

石敷SX11015　中金堂と講堂の間において設定したXI区のほぼ中央で検出された石敷きである（図233）。中金堂および講堂の中軸上に位置しており、第559 次調査区で検出された石敷SX8085などと同様、径20㎝程度の円礫が密に敷き詰められている。ここでは地山面直上に敷き詰められていることから、創建期にともなう石敷きである可能性が高い。おそらくは、中金堂と講堂を南北方向につなぐものであったと推定される。なお、今回は幅1.3m程度でしか検出できなかったが、その理由としては、南北方向の溝SD11017・11018が石敷きの東西に設けられていたことがあげられる。これらの溝は、中世以前に設けられていたものであるが、その詳細は不明である。

石敷SX11016　石敷SX11015の東西に展開する、地山に含まれる礫を利用した小礫からなる石敷きである。東西約29mにわたって検出されており、一部に分布の粗密が確認されるが、それらは後世に小礫が失われた結果と考えられ、本来はさらに広範囲にわたって石敷きが展開していたものと考えられる。

石敷SX11019　XI区の西側、南壁沿いで検出された、東西方向の見切石をもつ石敷きである（図233）。中金堂で実施した第325次調査では、中金堂の雨落溝からやや距離を置いて東西方向に展開する石敷SX8085が確認さ

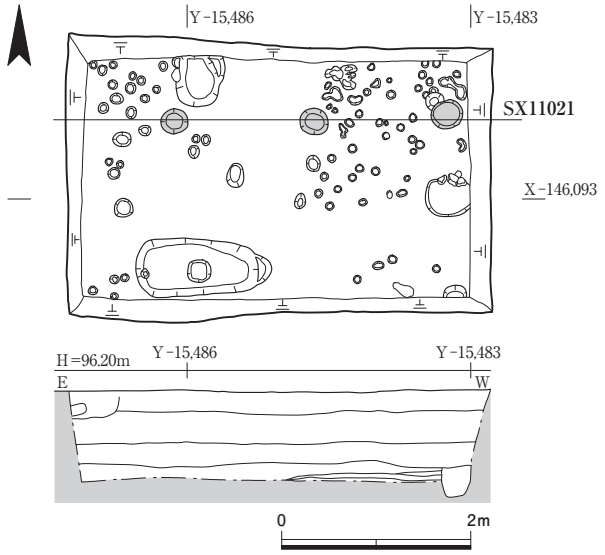


図234　第553次調査Ⅷ区遺構平面図・土層図　1：80

れているが、それに類するものが中金堂の北側にも展開していたものと考えられる。なお、Ⅺ区東端でもこの見切石の延長に相当する石敷きの痕跡が確認されたが、後世の攪乱による破壊が大きく、判然としない。

石敷SX11020　Ⅺ区の西端で確認された、南北方向の見切石をもつ石敷きである。東西幅約1.2mにわたって検出され、先述のSX8085に類似していることから、中金堂の西側に同様の石敷きが展開していたものと想定される。

柱穴列SX11021　中金堂前面の西側に設けたⅧ区で確認された柱穴列である（図234）。直径30～40cm程度、深さ20cm程度の柱穴３基が東西方向に並ぶ状況で検出された。中金堂の中軸を対称に、東側に設定したⅦ区では、既に第308次調査で確認されていた中世の能舞台にともなう仮設建物であるSB7530の柱穴列を一部再検出した。このSB7530が南北方向であるのに対し、Ⅷ区ではそのような建物が確認されず、かつ東西方向に展開することから、それらの仮設建物とは性格の異なる遺構と考えられるが、その時期も含めて詳細は不明である。

出土遺物

土　器　整理用コンテナ１箱分の土器が出土した。少量ながら、内訳は土師器、須恵器、瓦器、陶磁器からなり、古代から近現代まで多岐にわたっている。

瓦磚類　軒丸瓦６点、軒平瓦14点、丸瓦・平瓦が整理用コンテナ49箱分出土した。図235の１～２は軒丸瓦で、共にⅥ区から出土。１は奈良時代の6308Dで、天平年間の所産。２は単弁蓮華文。外区の珠文が省略されている。平安時代後半か。３～５は軒平瓦。３は6671Lで、奈良

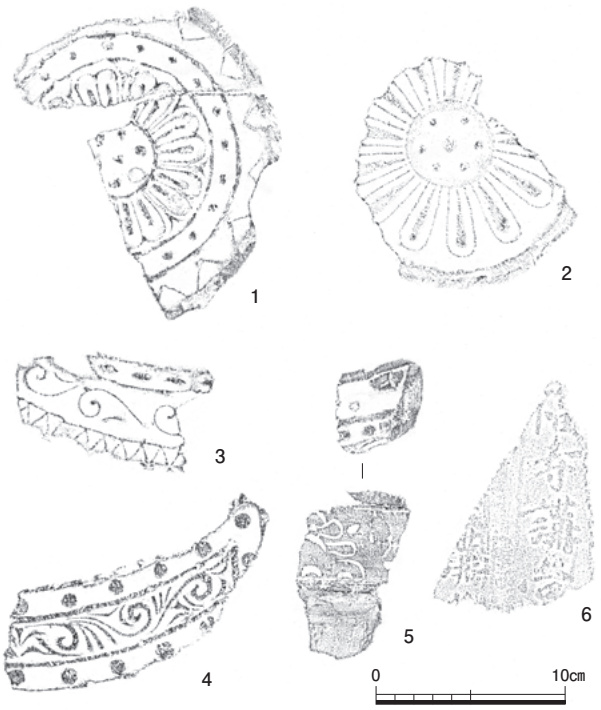


図235　第553次調査出土軒瓦　1：4

時代前半のもの。Ⅵ区から出土。４は奈良時代後半の6763C。Ⅹ区の中世瓦を含む包含層から出土。５は下外区にのみ珠文を配し、顎部に半截宝相華文を線刻する。承暦２年（1078）から嘉保３年（1096）頃のものと推定される。Ⅹ区から出土。６は平瓦で、凸面に「興福寺講堂」と刻まれた縦方向のタタキ痕跡が認められる。Ⅱ区より出土。　**（林）**

ま と め

中金堂と講堂の間に位置するⅪ区で検出した複数の石敷きは、第559次調査において経蔵と鐘楼の周囲で検出した石敷きや石組溝とあわせ、興福寺伽藍中枢部における建物周辺の様相を知る上で貴重な成果といえる。今後は、これまでの調査成果をふまえながら、建物のみならずその周囲まで含めた伽藍中枢部の空間利用のあり方について、検討を深めていく必要がある。　**（桑田）**

註

１）奈文研『興福寺食堂発掘調査報告』1959。
２）興福寺『興福寺防災施設工事・発掘調査報告書』1978。
３）興福寺『興福寺 第１期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅱ』、1999。
４）大岡實『南都七大寺の研究』中央公論美術出版、1966。
５）鈴木嘉吉『奈良時代僧房の研究』奈文研、1957。
６）薬師寺『薬師寺東塔基壇 国宝薬師寺東塔保存修理事業にともなう発掘調査概報』2016。
７）興福寺『興福寺 第１期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅶ』、2016。